大学生用の親準備性尺度の構成

小林　真・福田　結衣[1)]

Constructing Parenting Readiness Scale for College Students

Makoto KOBAYASHI and Yui FUKUDA

要旨

本研究では、大学生を対象とした親準備性を測定する尺度を作成した。小林(2014)が使用した質問項目をもとに、再検査信頼性・内的整合性・内容的妥当性の観点から質問項目を選択した。その結果、乳幼児への好意感情を測定する９項目と、育児への積極性を測定する11項目からなる親準備性尺度が構成された。項目の内容には一貫性があり、内的整合性・再検査信頼性も十分な値が得られた。本研究で作成した尺度は大学生の親準備性を測定し、介入効果を判定するために有用であるといえる。

キーワード：親準備性　大学生　尺度構成
Key words：Parenting Readiness, College Students, Scale Constraction

問題と目的

大学生に対して、どのような職業に就くかというキャリアに関する研究は多い。2003(平成15)年に次世代育成支援対策推進法が成立して以降、キャリア教育の充実、若者に対する就業支援体制の整備が提唱されてきた。しかし、就労だけでなく、結婚や子育てに関する人生設計もキャリアの一部だと考えることができる。その意味では、結婚や子育てに関するキャリア形成プログラムの開発や実践に関する研究はまだ少ない。

結婚・子育てに関するキャリア意識を考える際に、若者が親になるための知識と態度をどのように身につけていくのかという問題がある。親になるための知識や態度については、親準備性または親性準備性と呼ばれている。本研究では親準備性(Parenting Readiness)と呼ぶことにする。

親準備性という概念は、古くは母性準備性として女性を対象に研究されてきた(たとえば青木・松井・岩男,1986)。しかし青木ら(1986)の研究は、既に母親になった女性を対象としたものである。そして、母親である自分自身を「母親になってよかった」「母親である自分が好きである」などのように肯定的に評価する因子と、「自分は母親として不的確だ」「子どもが憎らしくなることがある」などのように否定的に評価する因子からなると報告されている。しかしこの２つの因子は、小林・渡辺(2000)が報告した、母親になった自分を受容する自己受容感や拒否感に相当すると考えられる。したがって、これから親になるであろう若者を対象とした研究では、青木ら(1986)の調査内容では不適切である。そこで、若者の親準備性をどのように測定するかという問題が発生してくる。

また現在では、子育て活動に父親も積極的に関与すべきだという考え方が広まってきている。そのため、親準備性は女性だけでなく男性も対象とした概念であるべきである。岡本・古賀(2004)は、親準備性を「子どもが将来､家庭を築き経営していくために必要な、子どもの養育、家族の結合、家事労働、介護を含む親としての資質、およびそれが備わった状態」と定義している。しかし家事労働や介護の問題まで含めてしまうと「親になるための準備性」を超えたより広い将来設計の概念になってしまう。そこで本研究では、親準備性を「親になるための知識や態度を習得すること」と概念的に定義し、その操作的定義としての親準備性尺度を開発すべきだと考える。

佐々木(2007)は、男女両性を対象とした「親性準備性尺度」の開発を行った。その結果、乳幼児への好意感情と育児への積極性という２つの下位尺度を構成

1)　鯖江市立王山保育所

した。各尺度の内的整合性は男女それぞれで十分な値を示したが、因子構造は男女で異なっていた。乳幼児への好意感情は男性では２因子構造、女性では１因子構造であった。また、育児への積極性は男性では４因子構造、女性では３因子構造となった。これは、調査対象者が男女100名ずつであり、項目数が多い尺度では因子が安定しないことに起因すると考えられる。

そこで小林(2014)は、対象者を増やして大学生・大学院生調査を行った。男性159名、女性197名の計356名を対象とし、男女込みで因子構造を検討した。佐々木(2007)が報告した乳幼児への好意感情と育児への積極性を測定する項目を一括して因子分析した結果、乳幼児への好意感情と育児への積極性に関する項目は別々の因子に負荷し、２因子構造となることが確認された。しかし、小林(2014)が報告した因子分析では、育児への積極性に負荷した項目は全て逆転項目であり、むしろ育児に対する忌避感を表す因子となった。したがって、親準備性を測定する尺度を作成するためには、調査項目を再検討する必要があると思われる。

また、佐々木(2007)や小林(2014)の調査は１回だけの調査であり、質問項目の再検査信頼性が確認されていない。もし大学生が普通に生活している中で、短期間(数週間程度)で尺度の得点が変動してしまうようであれば、その尺度は介入効果の判定に用いることはできない。したがって、時間を超えた得点の安定性が保証され、効果判定に使用可能な尺度が必要となってくる。

そこで本研究では、小林(2014)の質問項目を用いて、介入効果の判定に使用可能な親準備性尺度を再構成することを目的とする。そのためにまず、再検査信頼性、内的整合性、内容的妥当性の観点から項目を選択し、尺度を再構成する。次に、小林(2014)のデータを用いて、今回再構成した項目のみを使用した新たな尺度の記述統計量を求める。そして記述統計量と得点の分布を参考に、親準備性への介入およびその効果を判断する基準を設定する。

研究１　親準備性尺度の再構成

目　的

本研究では、小林(2014)が使用した親性準備性尺度の再検査信頼性を検討し、時間を超えた安定性を示す尺度を構成する。その際に、内的整合性も保証されるように項目を選択し、信頼性の高い尺度を再構成する。

方　法

対象者　Ａ大学の教育系学部の大学生58名(性別は尋ねていない)。なお、回答に不備のない56名を分析対象とした。

手続き　小林(2014)で使用した親性準備性尺度を、３週間の間隔を空けて２回実施した。２回とも、第１著者が担当する授業の終了時に調査用紙を配布し、その場で記入を求めた。

倫理的配慮　本研究では同じ対象者から２回にわたってデータを収集し、２回分のデータを対応させる必要がある。そのため、調査用紙の表紙に次の内容を記載すると共に、口頭でも説明した。

①調査への協力は任意であり、回答しないことによる不利は一切生じない

②２回分の回答を対応させるため、調査用紙の上部に学籍番号の記入を求める

③各回の調査用紙は封筒に入れ密封した状態で回収する。

④２回分の回答を対応させた段階で学籍番号が記入された部分を切断し､その後でデータ入力を行うので、２名の著者は誰の回答であるかがわからない状態で回答を見る

以上の条件を承認した場合にのみ記入した調査用紙を提出してもらうように説明した。したがって、調査用紙を提出した58名の対象者は研究の趣旨に任意で賛同しており、倫理的に問題はないと判断される。

調査時期　2014年５月～６月。

結果と考察

小林(2014)の親準備性尺度は、乳幼児への好意感情と育児に対する忌避感の２因子からなっている。この２つの因子を下位尺度として用いることができるように、それぞれ再検査信頼性を検討する。

１．乳幼児への好意感情尺度の検討

乳幼児への好意感情尺度の２回にわたる項目間の相関係数をTable 1に示す。

Table 1からわかるように、項目２の相関係数がやや低くなっているが、全体としては十分な再検査信頼性があると思われる。そこでこの９項目を合計した尺度得点を算出し、１回目と２回目の間の相関係数、各回の合計得点と標準偏差、α係数を求めた。尺度得点の再検査信頼性は$r=.840$($p<.001$)で十分な値であった。記述統計量は１回目について$m=38.88$、$SD=7.33$、２回目について$m=38.88$、$SD=6.99$であった。１回目と２回目の間に得点の差はなく、対応のあ

るｔ検定の結果はt(57)=0.00(ns.)であった。すなわち、３週間の間に乳幼児への好意感情の得点は変化していないことが示された。内的整合性は、１回目についてα=.956、２回目についてα=.953となり、十分な内的整合性が保証された。したがって、乳幼児への好意感情はこの９項目を用いて測定することが妥当かつ信頼性が高いといえる。

２．育児に対する積極性尺度の検討

育児に対する積極性の２回にわたる項目間の相関係数をTable 2に示す。

Table 2からわかるように、育児への積極性尺度は項目によっては相関係数がかなり低い項目が含まれている。したがって、尺度全体としての内的整合性および再検査信頼性が高くなるように項目を選別する必要がある。そこで次の手順で項目の選定を行った。

①再検査信頼性が低かった項目(有意水準がp<.05およびp<.01のもの)を削除した。

②残った項目を用いて各回のα係数を求め、その項目を削除した場合のα係数がもとのα係数を上回る値を示した項目を削除した。

③さらに残った項目を用いて、尺度得点の再検査信頼性、尺度得点の平均値の差を検討し、２回分のα係数を検討した。

その結果、まず相関係数の低かった項目７・８が削除された。次に残った13項目で各回のα係数を求め、その項目を削除した場合にα係数が高くなった項目６・15を削除した。

Table 1 乳幼児への好意感情尺度の項目ごとの再検査信頼性

乳幼児への好意感情		r	p
乳幼児1	あなたは赤ちゃんが好きですか	.918	***
乳幼児2	赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか	.687	***
乳幼児3	赤ちゃんのことについて知りたいと思い課すか	.763	***
乳幼児4	赤ちゃんに関心がありますか	.816	***
乳幼児5	赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	.938	***
乳幼児6	赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしますか	.861	***
乳幼児7	赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	.792	***
乳幼児8	赤ちゃんの世話をすることが好きですか	.865	***
乳幼児9	赤ちゃんに関心がありますか興味がありますか	.804	***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

Table 2 育児への積極性尺度の項目ごとの再検査信頼性

育児への積極性		r	p
育児1	育児は素晴らしい仕事だと思う	.686	***
育児2	育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思	.672	***
育児3	育児によって自分もまた成長できると思う	.464	***
育児4	育児は楽しいと思う	.543	***
育児5	育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う	.655	***
育児6	育児は人の生きがいだと思う	.606	***
育児7	育児はつらい仕事だと思う	.339	**
育児8	育児をしていると、自分の好きなことができないと思う	.310	*
育児9	育児はつまらない仕事だと思う	.442	***
育児10	将来、育児をするのが楽しみだ	.789	***
育児11	将来、自分が育児をするなんて考えたこともない	.770	***
育児12	育児をしている親はかがやいて見える	.418	**
育児13	育児をしている親は疲れてみすぼらしく見える	.516	***
育児14	自分も育児をやってみたい	.829	***
育児15	自分は育児をすることには自信がない	.456	***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

残った11項目を用いて、尺度得点の再検査信頼性と平均値の差を検討した。その結果、再検査信頼性についてr=.818(p<.001)となり、十分な値を示した。記述統計量は1回目についてm=42.88、SD=5.51、2回目についてm=42.27、SD=5.23であった。1回目と2回目の平均値の差についてはt(55)=-1.40(ns.)で有意差はなかった。内的整合性は1回目についてα=.785、2回目についてα=.770であり、概ね整合性が保たれていると考えられる。すなわち、項目ごとの再検査信頼性では相関が必ずしも十分ではなかったが(Table 2)、尺度全体で見ると合計点は時間を超えた一貫性があり、内的整合性も保証されていると考えられる。項目の内容も、育児にに対する肯定的なイメージや育児参加への意欲を尋ねる項目とこれらの内容の逆転項目からなっており、この11項目を用いることが「育児への積極性」尺度として妥当だと考えられる。なお、本研究で作成した質問紙は、Appendixに掲載してある。

研究2　親準備性尺度の記述統計量の算出

目　的

研究1で選出した調査項目を用いて、小林(2014)で使用したデータの記述統計量を求め、親準備性に関する介入の指針を作成する。

方　法

データの収集方法は小林(2014)と同一である。ただし今回は、親性準備性尺度の部分のみを用いた。特に「育児への積極性」については、研究1で再構成した11項目のデータのみを用いた。

結果と考察

親準備性やこれに類似する概念には性差が見られることが報告されており(小林,2015)、介入を行う際にも男性と女性では判断基準が異なると考えられる。本研究でも精査を検討したところ、乳幼児への好意感情についてt(293.66)=-7.87(p<.001：Welch法による)となり、女性の方が有意に得点が高かった。また育児への積極性については、t(350)=-4.49(p<.001)で女性の方が有意に高かった。そこで、性別に乳幼児への好意感情と育児への積極性尺度の記述統計量を求めた。その結果、男性では乳幼児への好意感情についてm=35.23、SD=7.98、育児への積極性についてm=40.82、SD=6.54であった。女性では乳幼児への好意感情についてm=41.31、SD=6.19、育児への積極性についてはm=43.83、SD=6.01であった。

2つの尺度の度数分布を検討したところ、乳幼児への好意感情については、得点の低い者が少なく、得点が高くなるにつれて人数が多くなる左に偏った分布をしていた。育児への積極性については、概ね正規分布に近い形をしていた。2つの尺度の箱ひげ図をFigure 1・2に示す。

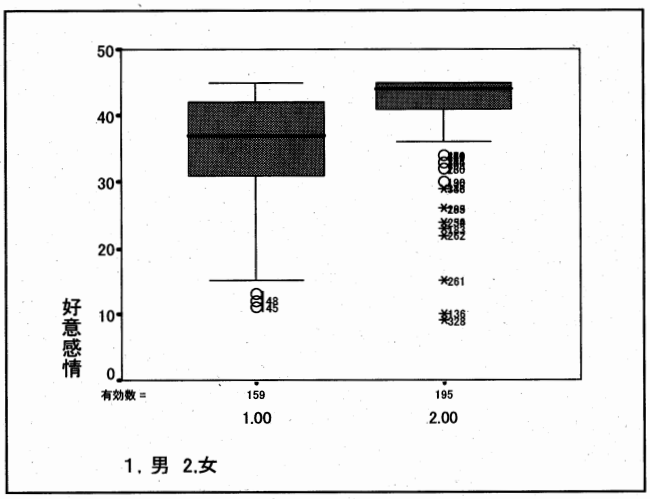

Figure 1　乳幼児への好意感情の分布

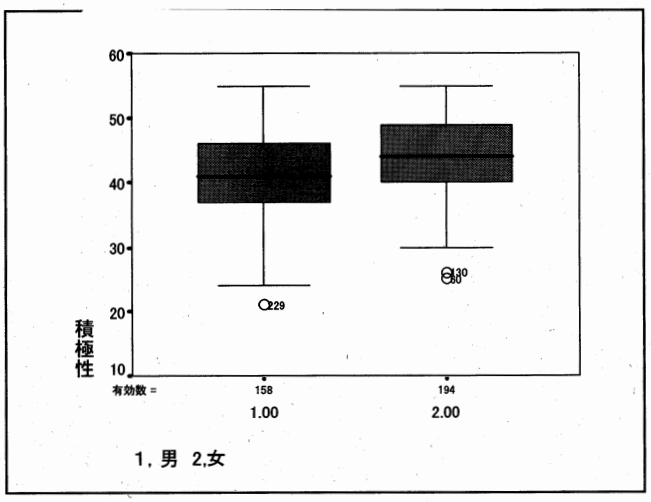

Figure 2　育児への積極性の分布

Figure 1からわかるように、乳幼児への好意感情について、男性は30点代～40点代前半に大部分が分布していることがわかる。これに対して女性の場合は、明らかに40点代に集中しており、箱ひげ図上の最小値も30点代後半であった。そのため、外れ値や極値と見なされる回答者がかなり存在している。したがって、親準備性に関する介入を行う際には、平均値と標準偏差を基準にするよりは、パーセンタイル順位を参照参考することの方が有用であろう。

一般に心理的不適応や行動問題を測定する尺度では10パーセンタイルまたは90パーセンタイルがカットオフ・ポイントと見なされている。また30パーセン

タイル～70パーセンタイルの間が標準的な得点の範囲と見なされている。Table 3に、本研究のデータに関する10%～30%および70%のパーセンタイル値を示す。

Table 3 2つの尺度のパーセンタイル値

	男性		女性	
	好意感情	積極性	好意感情	積極性
10%値	23点	32点	34点	35点
20%値	29点	35点	39点	39点
30%値	33点	38点	41点	41点
70%値	41点	45点	45点	48点

Table 3からわかるように、男性が将来父親になる希望があるとすれば、乳幼児への好意感情が23点以下、または育児への積極性が32点以下の場合には、親準備性の獲得に向けた支援が必要になると考えられる。また女性が将来母親になる希望があるとすれば、乳幼児への好意感情が34点以下、または育児への積極性が35点以下の場合には支援の対象になると考えられる。支援の結果として得点が30パーセンタイル値を超える値に達すれば、標準的な親準備性が獲得されたと見なしてよいであろう。

もちろん、10パーセンタイル値を上回っていれば30パーセンタイル値未満でも何もしなくてよいというわけではない。様々な形で親準備性の獲得を促すプログラムへの参加を呼びかけていくことが大切だと考えられる。

全体的考察

本研究では、佐々木(2007)を参考に小林(2014)が行った親性準備性尺度を、再検査信頼性と内的整合性を確認しながら再構成した。その結果、乳幼児への好意感情は原9項目をそのまま使用することが可能であることが示された。また、育児への積極性は4項目を削除し、11項目からなる新しい尺度を再構成した。11項目からなる尺度の再検査信頼性は十分な値を示し、内的整合性も概ね保証されたといえる。したがって、大学生を中心とした若者の親準備性を測定するには、2つの下位尺度からなる全20項目の尺度が相応しいと考えられる。

最後に、本研究で開発した親準備性尺度の今後の利用について2つの観点から検討する。1つは大規模な調査研究である。大学生が乳幼児に接したときの養育行動を外的基準とし、親準備性尺度の得点との関連を検討する基準関連妥当性の検討である。

2つめは、介入効果の検討である。これまでの親準備性の規定要因に関する研究は、ほとんどが1回だけの調査で、過去のどのような体験が親準備性に影響を及ぼしているかを分析していた。例えば川瀬(2010)は、ボランティア等で乳幼児の世話をしたり一緒に遊んだ経験を持つ学生は、乳幼児への好意性の得点が高いことを報告している。しかし、親準備性の高い学生だからこそ、過去に乳幼児との関わりを積極的に求めていたのかも知れない。したがって、「ある体験が親準備性を高める」という仮説を検証するためには、何らかの体験プログラムを実施し、その全後で親準備性得点が変化したかどうかを確認しなければならない。

佐々木・小坂・末原・町浦・定藤・岡沢(2011)は、看護系および教育系の大学生19名(男性9名・女性10名)を対象に、保育所における乳幼児とふれあう体験プログラムを実施した。佐々木(2007)の尺度を従属変数としたところ、体験群は2つの下位尺度の得点がいずれも上昇したが、統制群には有意な変化は見られなかった。佐々木ら(2011)はさらに、fMRI装置を用いて、乳児の泣き声を聞かせた場合／泣き顔の映像と泣き声を共に提示した場合の脳の賦活部位を検討した。その結果、体験群では乳幼児の泣き声に対する敏感さが増し、泣いている状況の推理力や共感性を高めることができたのではないかと述べている。しかし賦活された脳の部位がどのような認知・情動機能を反映しているのかについては今後の研究の進展を待つ必要がある。脳の賦活部位の検討から、乳幼児とのふれあい体験が共感性を高めることが明確になれば、それは一つの妥当性を示す証拠といえよう。しかし、実際の育児行動や本人の認識を測定しているわけではないので、基準関連妥当性の検証としては不十分である。やはり、育児行動を外的基準とした研究が必要であろう。

親準備性を高めるプログラムを実施する際に、統制群を設定することが困難な場合や、1事例または少数事例を対象とすることしかできない場合もある。統制群の設定が困難な場合には、効果測定で用いる尺度が通時的安定性を備えている必要がある。本研究で開発した尺度は、内的整合性と再検査信頼性が確認されており、さらに構成概念としても先行研究と同様に、乳幼児への好意感情と育児への積極性という2つの下位尺度からなっている。したがって、今後、この尺度を利用した介入研究を行い、尺度得点の上昇が見られることと、その際に対象者の養育行動がどのように変化したかを確認する必要がある。こうした研究の積み重ねによって、尺度の妥当性が検証されれば、親準備性の育成プログラムの開発に寄与するところが大きいであろう。

引用文献

青木まり・松井豊・岩男寿美子 1986 母性意識から見た母親の特徴ーライフ・ステージ，自己評価，充実感との関係からー．心理学研究，**57**, 207-213.

川瀬隆千 2010 大学生の親準備性に関する研究．宮崎公立大学人文学部紀要，**17**, 29-40.

小林真 2014 認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか．富山大学人間発達科学部紀要，**8**(2), 43-48.

小林真 2015 大学生の養護性とそれに関連する諸要因の性差の検討．富山大学人間発達科学部紀要，**10**(1), 45-56.

小林真・渡辺亜矢 2000 母親であることについての女性の自己意識ー自己受容感と自己拒否感に関する調査ー．富山大学教育学部研究論集，**3**, 63-67

岡本祐子・古賀真紀子 2004 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析．広島大学心理学研究，**4**, 159-172

佐々木綾子 2007 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討．福井大学医学部研究雑誌，**8**, 41-50.

佐々木綾子・小坂浩隆・末原紀美代・町浦美智子・定藤規弘・岡沢秀彦 2011 親性育成のための基礎研究(3)ー青年期男女における乳幼児との継続接触体験の親制準備性尺度・fMRIによる評価ー．母性衛生，**51**, 655-665.

付記

本研究における統計処理は、研究環境上の問題からSPSS 21とSPSS ver.10を併用した。

Appendix

乳幼児への好意感情

あなたの赤ちゃんに対する感情についてお尋ねします。以下の項目それぞれについて「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の中から自分にあてはまるもの1つを選んで○で囲んでください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	あてはまる
1．あなたは赤ちゃんが好きですか	1	2	3	4	5
2．赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか	1	2	3	4	5
3．赤ちゃんのことについて知りたいと思いますか	1	2	3	4	5
4．赤ちゃんに関心がありますか	1	2	3	4	5
5．赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	1	2	3	4	5
6．赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしますか	1	2	3	4	5
7．赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	1	2	3	4	5
8．赤ちゃんの世話をすることが好きですか	1	2	3	4	5
9．赤ちゃんに興味がありますか	1	2	3	4	5

育児への積極性

次にあなたの育児に対する感情についてお尋ねします。以下の項目それぞれについて「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の中から自分にあてはまるもの1つを選んで○で囲んでください。

	あてはまらない	ややあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	あてはまる
1．育児はすばらしいと思う	1	2	3	4	5
2．育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う	1	2	3	4	5
3．育児によって自分自身もまた成長できると思う	1	2	3	4	5
4．育児は楽しいと思う	1	2	3	4	5
5．育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う	1	2	3	4	5
6．育児はつまらない仕事だと思う	1	2	3	4	5
7．将来、育児をするのが楽しみだ	1	2	3	4	5
8．将来、自分が育児をするなんて考えたこともない	1	2	3	4	5
9．育児をしている親はかがやいて見える	1	2	3	4	5
10．育児をしている親は疲れてみすぼらしく見える	1	2	3	4	5
11．自分も育児をやってみたいと思う	1	2	3	4	5